

对人的相互交渉における身体接触の意義について

徳 永 豊

(国立特殊教育総合研究所)

要旨：赤ちゃんのよりよい発達をめざして、養育者が赤ちゃんの身体に触れながら、養育者と子どもの「つながり」を豊かなものにする取組が展開されている。本研究では、この身体接触を手がかりに、肢体不自由のある重度・重複障害児との指導を展開している指導理論・方法を概観し、障害のある子どもの身体と心に触れるタッチを、どのように豊かなものにしていけるのか、子どもの身体と心の状態をよりよいものにするための身体接触とはどのようなものか検討した。

1 はじめに

近年、育児関係の雑誌で、「タッチケア」についての特集が組まれている。赤ちゃんのよりよい発達をめざして、養育者が赤ちゃんの身体に触れながら、養育者と子どもの「つながり」を豊かなものにする取り組みについて、具体的な実践方法が紹介されている。

筆者は、肢体不自由のある重度・重複障害児の療育や教育の実践を通して、子どもの身体にどのように触るかについては、あれこれと工夫してきた。また、養育者との心理相談において、養育者が障害のある子どもの身体と心に触れるタッチを、どのように豊かなものにしていけるのか、子どもの身体と心の状態をよりよいものにするためのタッチとはどのようなものか検討してきた。

障害のある子どもの発達を考えた場合にも、その基盤となるのは、養育者と子どもとの豊かな「つながり」である。この「つながり」を形成していく上で、タッチ(身体的接触)は重要な要素のひとつと考えられる。

障害のある子どもには、動くことに難しさのある肢体不自由(脳性まひ)や落ち着くことの難しい情緒障害(自閉症)といわれる子どもたちがいる。これらの子どものよりよい発達を援助していく領域を「発達臨床」とすれば、その領域でタッチ(身体接触)は、どのように活用されているのであろうか。

ここでは、その状況を振り返るとともに、心理学におけるタッチの位置づけを検討した。さらに、より豊かなつながりを形成するための母子間の「相互作用」という視点を取り上げた。

発達臨床においてもタッチは重要な機能にもかかわらず、議論されることの少ないテーマである。「タッチケア」での知見が、発達臨床においてよりよく活用されること、また「タッチケア」に発達臨床の視点を取り込むことで、実りのある豊かな「タッチケア」に成長できるのではないかと期待する。

2 発達臨床におけるタッチ

発達臨床において、身体的接触を伴う対応が中心となるのは、第1に病院・療育センター等の医療機関である。医学的な対応や理学療法・作業療法において、タッチを伴いながら、子どもの療育が進められる。特に医療においては、身体的な検査、採血・輸血、チューブの調節等の医学的タッチと、抱っこして揺らす、キスをする、おむつを交換する、ミルクをあげる等の社会的タッチを区別することが求められる。医学的なタッチは、障害のある子どものストレスを高める可能性が指摘されている(Gorskiら, 1990)。社会的タッチは、障害のある子どもの発達にも好ましい影響を与えると考えられ、今後、これらの医療機関においても、「タッチケア」の取り組みは重要となる。また、理学療法や作業療法において、経験豊富なスタッフは、タッチを単に身体的な接触に留めず、その子ども自身へ働きかけとして、物理的・心理的な働きかけである社会的タッチと考えているのではないだろうか。

作業療法士のErhardt(2001)は、「作業療法におけるタッチの役割」について述べている。その中で、「作業療法士はその仕事として、多くの目的で、いろいろな人々にタッチすることが求められる。しかし、その本人自身にも触られ、触るニーズがあることを忘れてはいけない。タッチが、自分自身を含めて、人々に、どのような影響を与えるかについてよく知っていることが重要である」としている。アメリカ作業療法学会では、「タッチは、コミュニケーションの最も重要な形式」ということが、1976年に話題となっている。

一方、発達臨床の心理・教育では、タッチはどのように考えられているのであろうか。障害のある子どもの発達を促すために、いくつかの理論・方法がある。それらの中で、触覚・固有覚を重要なものと位置づけたり、援助手段として、タッチを活用するものがある。

1) 感覚統合法

感覚統合法とは、外から適切な感覚刺激を与えることに

よって、「身体及び外界からの様々な感覚情報を中枢神経系において、組織化及び統合すること」で、行動の改善を図る体系といえる。(坂本・中林, 1990)。

この立場では、感覚情報の一つとして触覚情報に注目し、「抱かれること、おんぶや抱っこを嫌がる」等感覚刺激への反応を評価する。感覚反応に問題があれば、「感覚刺激を適切に登録かつ調整することで、感覚処理過程が改善され、行動に変化が生じる」と考えている。この理論において、タッチに伴う触覚や固有覚は、刺激情報のひとつであり、その情報を適切に処理することが、発達上重要とされている。

2) ムーブメント教育

ムーブメント教育とは、感覚・知覚運動の理論を基礎として、身体運動を中核として、子どもの成長・発達を促進させるプログラムであり、その実際のすすめかたについてまとめられたものである。(小林・永松, 1990)。

この立場では、身体運動にとって、「身体意識」が重要なものであり、それは「身体像」「身体図式」「身体概念」の3つから構成される概念としている。「感じられるままの身体」である「身体像」を形成する要素のひとつに、触覚や固有感覚があり、視覚や内臓の感覚と等しく重要とされている。この理論において、タッチに伴う触覚や固有覚は、身体意識を形成する上で欠くことのできないものとされている。それは、子どもの成長・発達の核である身体運動において重要な要素と位置づけられている。

3) 臨床動作法

臨床動作法について、成瀬(1995)は、「クライアントの動作という心理活動を主たる道具として心理治療ないし広く心理臨床一般を援助しようとするセラピストの活動」としている。多くの心理療法は「ことば」をその道具としているが、臨床動作法では、非言語的な活動の中から、「動作」を道具とするところが特徴とされている。

この臨床動作法は、脳性まひ児が示すからだの動きの不自由を改善する理論・方法として開発され、自閉症や注意欠陥多動性障害の子ども等の行動改善にも効果があることが示され、さらには不登校の子どもや高齢者の心理療法等に活用されている理論・方法である。

大神(2000)は、臨床動作法の実践は、「外から見ただけでは分からない、からだを通したきめ細かい二者間のやりとり(interaction)が展開されている」としている。

この理論において、タッチは、触覚・固有覚というよりも、コミュニケーションの手段であり、相手を理解する手段で、また相手に働きかける手段でもある。このタッチについては、臨床では極めて優れた道具であるが、二者間において正負両方向の情動的な反応を引き起こしかねず、注

意深く、慎重にすすめる必要があると指摘されている(成瀬, 1995)。

4) 抱っこ法

抱っこ法とは、「身体保持と身体接触を活用する多様な技法を駆使しながら、内面の苦痛を軽減し、心理的な抵抗と抑圧を克服し、人との楽しい触れ合いを促進し、愛着を深め、自我を育て、社会的、情緒的、認知的な成長を助けることを目的とした心理治療の体系」とされている(阿部, 1990)。この立場は、子どもにとって、母子間の愛着を中心とした情緒の発達が重要と考えている。それにもかかわらず、こじれた情緒発達は、行動上の問題となり、抱っこ法は、それを立ち直らせるための手段であるとしている。

この理論において、タッチは、身体保持と身体接触に伴うものであり、相互交流の手段であり、否定的な感情の解きほぐすための手段と考えられている。

ここでは、発達臨床において比較的活用される援助理論において、タッチがどのように位置づけられているかについて述べた。タッチは複雑な現象であり、多くの側面を持つものである。触覚・固有覚としての側面、コミュニケーションの手段としての側面、そして情動の発達とつながりのある側面があるといえる。

3 心理学におけるタッチの位置づけ

発達臨床においてでなく、発達心理学において、タッチは、どのように位置づけられるのだろうか。

乳幼児の母と子の肌の触れ合い(タッチング)について、生理学、心理学、人類学、そして動物行動学のデータを手がかりに、その重要性について深い考察を加えたのは、Montagu(1971)である。「タッチング-親と子のふれあい」では、タッチングがもたらす生理的、生物的、心理的、文化的な意味について検討されている。

しかしながら、タッチまたは身体的接触は、心理学や発達心理学においては、あまり取り上げられることの少ないテーマであり、母子関係や対人関係においていくつかの研究がある。

1) 触覚又は触知覚としてのタッチ

一般に多くの発達理論は、その初期段階において、感覚的な要素と運動的な要素の重要性を強調している。

ピアジェは、初歩的な感覚運動的段階において、反射的な活動、反射的なスキーマを行使して、外界を取り入れていく重要性を強調している。

またワロンは、発達の基盤として、身体を取り上げ、中枢に向かう求心系のと外界に向かう遠心系の作用があるとし、生命機能、適応関係機能、姿勢・情動的機能が発達す

るとしている。

これらの理論においては、視覚、聴覚と同じように触覚も重要な感覚、求心系の作用とされている。視覚や聴覚、触覚等による情報を通して、経験を深めることにより、情緒的に安定し、周囲の状況を理解していくようになる。特に触覚は、視覚などの他の感覚に比べて、早期から発達し、生後1年ほどの間に、手で物を触れることで情報を収集する高い能力を獲得することが可能となることが明らかになっている (Bushnell & Boudreau, 1991)。

このように外界を捉えるために触覚や触ることを通して、外界を探索する活動は、触運動知覚 (haptic perception) といわれている。暗闇で、テーブルの上のテレビのスイッチを手探りしたりする時にこの機能が活躍する。これらの能動的な触運動知覚 (active touch) については、その特性が研究されている。

この触覚、触運動知覚については、視覚障害ある子どもの発達において重要なテーマであり、外界を捉える重要な情報源となっている。

2) 愛情、愛着の基盤としてのタッチ

(1) 健康な発達における身体的接触の重要性

触覚的刺激を伴う身体的接触が子どもの発達において重要なことを示す研究として、比較行動学的な視点からの実験的観察研究がある。ハーローは、子ザルの行動観察から「接触の快感が、愛情を構成する基本的に重要な要素であることには、驚かなかった。しかしながら、接触が授乳をこれほど完全に越える変数であるとは考えてもみなかった」と述べている (Montagu, 1971)。

この実験的観察では、2種類の代用母親 (布製と針金製) を作り、哺乳条件と組み合わせ、子ザルが代用母親のもとで過ごす時間を測定した。結果として、①布製の代用母親と過ごす時間が、針金製の代用母親と過ごす時間より多く、②針金製の代用母親から授乳を受ける場合でも、授乳のない布製の代理母親と過ごす時間が多かったことが示された。これらの結果は、母親と共に過ごす行動において、接触の感覚が重要な要素であって、授乳はそれほど重要な要素でないことを示していると考えられた。

さらに、ハーローとその仲間たちは、次の事実を観察した。発達初期において十分に母親との接触が満たされず育ったサルは、母親になった場合、子ザルに冷淡であったり、暴力的で虐待的であった。

これらの観察は、発達初期における母子間の身体接触が、子どもの健康な発達において重要なことを裏付けるものである。

(2) 愛着の理論から

ボウルビーは、英国の精神科医で、両親が亡くなって、施設に預けられた乳幼児を観察していると、衣食住がきちん

としているのに、成長が悪く、死亡率が高いことに疑問を持った。そこで、保母さんに乳児を抱き、優しく扱うように指導したところ、死亡率も減り、成長の速度も普通になってきた。このことから、ボウルビーは、乳児にとって同一人物から優しく扱われることが大切なことに気づいて、多くの研究を実施し、「愛着」の概念とその一般的な発達段階を示した (数井, 1993)。

それによると、乳児の生後1,2ヶ月は、泣くことで、養育者を引きつけ世話をしてもらいが、母親とその他の養育者を区別していない段階とされている。

6,7ヶ月になると、乳児は母親と他の養育者を区別し、泣き、微笑、発声などで養育者の反応を引き出す。しかし、母親が視野から消えても不安を示さない。

次ぎの8ヶ月から10ヶ月には、人見知りや分離不安が生じる頃で、主たる養育者である母親に対する強い接近行動と、母親が見えなくなることに対する不安と抵抗を示す。母親と共にいるという安心感を土台に、探索行動が始まる時期で、この安心感をもたらす母親を「安全の基地」として、乳児が徐々に行動の範囲を広げていく。

乳児と母親は、このような愛着関係を形成し、それを発展させていく。この関係を形成する初期段階では、タッチを伴う抱っこやおんぶ等の接近、接触の行動が重要と考えられるが、徐々に身体的接触を必要としない関係形成に移行していくとされている。

また、ボウルビーの同僚であるエインズワースは、この愛着関係における個人差について研究した。見知らぬ人の出逢った時の子どもの行動を実験的に観察して、乳児の行動には、3つのタイプがあることを示した。見知らぬ人と出会った時の不安に対して、すべての乳児が母親との接近、接触行動によって、それを解消するだけでなく、母親とつながりのない行動や接近、接触の欲求はあるものの反抗的な行動を示す場合があることを示した。

3) コミュニケーションの手段としてのタッチ

乳幼児の発達の領域でなく、人と人との関係を課題としている社会心理学で、タッチが取り上げられている。そこでのタッチは、コミュニケーションのための非言語的な行動のひとつとされている。

和田 (1996) は、コミュニケーションにおける非言語的行動として、①対人距離 (他者とどれくらい距離をおくのか)、②体の動き (傾き、向き、姿勢など)、③表情 (微笑を含む)、④視線 (瞳の動きも含む)、⑤接触 (触れる、抱き合う)、⑥近言語 (話の間、流暢さなど)、⑦嗅覚作用 (他者からの臭い、匂い)、⑧人工物 (化粧、服装、装飾品) をあげている。

非言語行動のひとつである視線の交錯 (アイコンタクト) には、相互作用している二者間に接近と回避の圧力が作用

するとされている。ここでの接近力とはフィードバック要求や親和欲求であり、回避力とは見られる恐怖、内的な感情を示す恐怖、そして他者の拒否反応を見る恐怖等である。二者関係の適切な親密さのレベルは、この接近と回避のバランスが取れたところとなるとされている。つまり、視線の交錯には、恋人同士の見つめ合いのような接近の作用と「ガン飛ばす」のような回避の作用として機能することがある。

視線の交錯と同じように、身体的接触についても二者間に拮抗する2つの圧力であると考えられる。それは、触る者と触られる者の間で生じる接近と回避である。さらに、身体的接触は根本的、直接的な行動であり、より情動的な評価を伴いやすく、不安、不快や困惑という否定的情動か、もしくは安心、愛情、好意という肯定的情動を引き起こす特性があることが予測される。

4 相互作用の手段としてのタッチ

近年の乳幼児の研究の発展に伴い、母子間の相互交渉を対象とする研究が増加し、一歳未満の乳児が持つ多くの能力が明らかになってきている。視覚的な刺激や聴覚的な刺激をどのように区別できるかから、赤ちゃんが示す微笑みがどのように発達するか、また、見ている対象をどのように母親と共有するのかと、幅広いテーマで研究が展開されている。

タッチや身体的接触については、それだけで、研究テーマとして取り上げられることは少ない。その理由は、タッチや身体的接触は、子どもとの養育者の二者間で生じる複雑な現象であり、科学的な研究に馴染みにくいテーマだからである。同じようなテーマに、母子間の相互交渉があげられる。

乳児のコミュニケーションを検討している Adamson (1995) は、乳児の社会的相互作用において、乳児は、大人のタッチングに肯定的に反応する可能性が高いとしつつ、「タッチングは、大人が対人的関わり最初の時期を調整するのに利用できる有力な（しかし今まで正当に評価されなかった）注意獲得行動」としている。

さらに、1歳未満の乳児が体験している対人世界について検討している Stern (1985) は、その発達の基盤として、自己の意図した行為（口へ拇指を持っていく）が、自己発達において重要な機能を果たしているとしている。

それは、乳児がいつ、どのように、自分と母親を区別できるようになるかという疑問への一つの答えである。乳児と母親との身体接触を伴う共同活動の中で、「赤ちゃんが自分の経験のうちの不変の部分を探し、認識する」という考えが、その問題の解決糸口になるとしている。それは、身体接触を伴う活動の中で、〈動かす〉感覚と〈動いた〉感覚の組合せの中で、〈動かそう〉として、常に随伴する

〈動いた〉感覚が重要であるとしている点である。その体験は、乳児が母親に、手を持たれて動かされ時に生じる感覚、つまり〈動かす〉感覚がない時に、〈動いた〉感覚がある場合とも、さらには母親が乳児の口に乳首を入れる時に生じる感覚、〈動かす〉感覚も〈動いた〉感覚もない場合とも異なる体験とされている。つまり、母親との関わりで起こる自分のできごとが不変であることに気づくことが、母親とは異なる「自分」に気づくことと考えられている。

このように、近年の研究動向から、タッチの持つ機能は、その発達において重要なテーマとされていて、母子相互作用において、欠かすことのできない要素となっている。

5 おわりに

近年、取り上げられることが多くなった「タッチケア」については、今後のその発展が望まれる。治療的なタッチの歴史は、人類の歴史に匹敵するものと思われる。このタッチについて、いわゆる民間療法的な取り組みでなく、臨床的な技術としてまとめたのは、クライガー (Krieger, D) である (Meehan, 1990)。クライガーは、看護婦であり、生理学者だった。1973年に、タッチ療法として開発し、「タッチは、物理的な要素だけでなく、社会的な、心理的な、魂に働きかける要素を含むものである」として、コミュニケーションと組織化の主要なモードであるとしている。

その後、タッチを研究対象として、多くの領域の専門家が議論したのが1989年であり、それは、Jonson & Jonson Pediatric Round Table Xにおいて、「タッチ」がテーマとされた。科学者、医者、保健専門家が「タッチ」をテーマとして、それぞれが研究を報告しつつ、討議を重ねた。その報告が国立乳幼児臨床プログラムセンターが発刊する臨床乳幼児報告 (Clinical Infant Report) シリーズの「Touch: The Foundation of Experience」である (Barnard, 1990)。

心理学でタッチがどのように位置づけられてきたのか、またタッチケアの研究の動向を踏まえつつ、発達臨床において、子どもとの豊かな「つながり」を基盤としながら、よりよい発達援助に取り組みればと考える。

特に、障害が重度で、重複している子どもの場合は、日常生活のすべての介助に、タッチが伴う。このタッチが、子どものよりよい生活やよりよい教育を実現するために、子どもと養育者との信頼あるつながりになればと考える (徳永, 1992; 1997)。

さらに、このことは高齢者の介護にも共通することである。人が生まれて、そして死を迎えるまで、人とふれあうことは重要なことである。今後は、「身体接触」が、多くの領域で有効に活用されるために研究を展開することが課題となる。

引用文献

- 1) 阿部秀雄：発達障害児のための抱っこ法坂本龍生等（編著）障害児指導の方法，学苑社，148-155，1990.
- 2) Adamson, L. B. Communication Development during Infancy. Westview Press. 1995. 大藪泰・田中みどり（訳）乳児のコミュニケーション発達，川島書店，1999.
- 3) Barnard, R. N. & Brazelton, T. B.: Introduction Barnard, R. N. & Brazelton, T. B (Ed.) Touch: The Foundation of Experience. International University Press, Madison. 1-7, 1990.
- 4) Bushnell, E. W. & Boudreau, J. P.: The Development of Haptic Perception during Infancy. Heller, M. A. & Schiff, W. (Ed.) The Psychology of Touch. Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Publishers. 139-161, 1991.
- 5) Erhardt, R. P.: The Role of Touch in Occupational Therapy.
<http://www.advanceforot.com/advanceyourself/touchcourse.html> 2001.
- 6) Gorski, P. A., Leonard, C. H., Sweet, D. M., Martin, J. A. & Sebring, S. A: Caregiver-Infant Interaction and the Immature Nervous System: A Touchy Subjects. Barnard, R. N. & Brazelton, T. B (Ed.) Touch: The Foundation of Experience. International University Press, Madison. 229-251, 1990.
- 7) 数井みゆき：愛着とそれをとりまく環境無藤隆（編）現代発達心理学入門，別冊発達15，ミネルヴァ書房，70-81，1993.
- 8) 小林芳文・永松裕希：ムーブメント教育MGLプログラム。坂本龍生等（編著）障害児指導の方法，学苑社，222-230，1990.
- 9) Meehan, T. C: A Role for Therapeutic Touch: A Review of the State of Art. Barnard, R. N. & Brazelton, T. B (Ed.) Touch: The Foundation of Experience. International University Press, Madison. 365-382, 1990.
- 10) Montagu, A.: Touching, The Human Significance of th Skin. Columbia University Press 1971. モンタギュー：タッチング佐藤信行・佐藤方代（共訳）平凡社，1977.
- 11) 成瀬悟策：臨床動作学基礎，学苑社，1995.
- 12) 大神英裕：動作学のための基礎理論。成瀬悟策（編）実験動作学—からだを動かすところの仕組み—。現代のエスプリ別冊，至文堂，28-37，2000.
- 13) 坂本龍生・中林稔堯：自閉症のための感覚統合法。坂本龍生等（編著）障害児指導の方法，学苑社，114-122，1990.
- 14) Stern, D. N.: The Interpersonal World of the Infant. Basic Book, Inc., New York. 1985. 小此木啓吾・丸田俊彦（監訳）神庭靖子・神庭重信（訳）乳幼児の対人世界—理論編—。岩崎学術出版，1989.
- 15) 徳永豊：他者との身体接触によりもたらされるからだの再認知—教師を対象とした実習での体験と肢体不自由児の指導—。国立特殊教育総合研究所研究紀要第19巻，31-37，1992.
- 16) 徳永豊：障害のある子どもの前言語的発達を促すための動作法—重度・重複障害児の対人的相互交渉の手段として—。リハビリテーション心理学研究，24，35-43，1997.
- 17) 和田実：非言語的コミュニケーション—直接性からの検討—。心理学評論，39(2)，137-167，1996.